



コンポジション
「構成がきちっとできていることによって、リリカルな情感がウァーッと浮かんでくる。これは音楽を作曲するがごとしです。制作ではその両方で苦しむわけですが」と話す寺久保さんは、音楽にも精通している。白日会の事務所もつとめる多忙な日々。

豊穡なる黄色。いや金色こんじきといったほうがいいかもしれない。大きな色面には、絵具が物質感をとどめてしつかりと張り付いている。薄塗りを重ね入念に仕上げた画にはない実在の感触。しかしその筆触で画家がとらえようとしているのは、目の前の確かなかたちの向こうに潜む、靡げな、かそけき気配、予感のようなものなのだ。

さらに実相観入するがごとく見つめてみると、色面はしだいに純化していき、一瞬、輝く光そのものに転調して、描かれた事物の背後にある世界が現れてくる。

「見る人が絵の中に心を投入しないと見えてこないし、立ち上がってこないのです。絵は物体として在るけれども、何かかけがえのないものを宿すのだということをもっと大切に感じてください」

作品のなかでそれをリリカル（抒情的）な域にまで高めたいと寺久保文宣さんはいう。

西欧の伝統を受け継ぐ油絵は、もともと物質的で人工的なもの。しかし、投影された心象と一体になって絵がいのちを宿す時、画奥から抒情リリシズムが光芒を放ち、美しい旋律となって流れ出る…、そんな至高の詩精神の在り処を希求するのだ。

埼玉県上尾市。生垣に囲まれた居

アトリエ

訪問

112

撮影・五十嵐秀幸

虚と実の狭間を
見つめて

寺久保 文宣

Fuminori Terakubo



イエロー・シンフォニア 油彩 10号



宅の庭に別棟のアトリエが建つ。二四
畳という室内の正面に置かれている
百号は、昨秋の日展出品作『黄色い
部屋』と今春の白日会展の『E・C・H・O
―室内―』だ。

「見えるものを通して、見えないもの
を描く」という言葉が思い浮かぶ。

実際の制作の過程を伺うと、対象
を再現的に写し出すのではなく、お
およその構想の中で現れてくるもの
を探しながら描いていくと語る。モ
チーフそのものも、描かれた状態をイ
メージしつつ進めるので、どう変わっ
ていくかわからない。虚と実を往還し
ながら、その狭間に答えを見出して
いく描き方なのだ。

「自分の感性と段取りでやっていって
も、出てきたものはイメージするもの
とは遠く隔たった物体で、大作の場
合は、三度くらい裏切られて、ある
時ようやく絵として自立して語り始
めてくれる、まさに格闘技的手法で
すね」

大作の主題は、樹木と人体。
『E・C・H・O』シリーズで、裸婦と樹木
をリズムで絡めながら、樹と人のシンク
ロニシティを表現したいと試みてい
る。

「僕にとって人体はまだまだ謎なんで
す。西欧のアカデミズムはギリシヤに
発していますが、裸体は日本の文化
とは真逆のものだと。」

近代洋画を学びながら、日本であ



るといふ亀裂を抱えて、その矛盾を絵の中で自分なりに変体させたいと続けているのです」

最初の日展特選が『木霊』(01年)。そこからこだま⇨ECHOと繋がり、シリーズが始まった。

一方、小品では、花を描いて『シンフォニア』と名付けたシリーズを続けてきた(バツハの楽曲集『インヴェンションとシンフォニア』からとられている)。

「花は自在なところがあって、画面のなかで再構築するんです」

「シンフォニアには作曲という意味もあるのですが、わりと描写的に描いたものもある。色面構成を扱ったもの、装飾性を加えたものと表現の幅がかなりある。僕にとっては小さな実験室のような……」

アトリエの壁に、『水平線と天体』と題した、二十代後半の作品が掲げられていた。あらかじめ絵具を用いて紙に色面をつくっておき、それを切って貼り込んだカラーージュである。

晩年のマチスの切り絵が念頭にあったのかもしれないというが、「マチスの絵画に出会い、絵の面白さを体験したことが、これまで絵を続けてきた僕の根本になっています」



ECHO 油彩 F100号 2012年 第44回日展

マチス体験の衝撃

一九六四年埼玉県浦和市の生まれ。五歳で上尾市の現在の住まいに移った。四歳の時に描いた絵が残されている。よく見ると機関車だが、すでにユニークな色彩が構成的で面白く、無意識の抽象を思わせる。

「絵は好きで、小、中学を通して美術の成績だけは良かったのですが、奥手でしたから、いつも白日夢を見ているようにボオツとしてましたね」

浦和市立高校では美術部に入り、顧問だった一水会の小川 游の薫陶を受けた。

「高校の頃はスルバランのスペイン・バロック絵画に傾倒して、雨戸を閉めた暗い部屋でモチーフをつくり、光を当てて明暗対比で描いていました」

リアリズムからの転機は、芸大をめざして浦和の予備校彩光舎に通い



植樹祭 油彩 F100号 2004年 第36回日展会展

始めた頃。色彩で描いた絵の感覚を褒められ、バロック的描写とは異なる世界があることに開眼する。
 八四年、東京芸術大学油画専攻に入学後はしだいに現代美術への関心を深め、卒業制作は細かい点で構成した胎蔵界曼荼羅を描いた。
 「現代アートというのは、コンセプト

が第一で、それに合わせて表現様式や素材を選ぶのですが、僕が捨てられなかったのは、平面に色、絵具だったんです。やっぱり自分は絵が描きたいのだと思います」
 大学院一年で訪れたニューヨーク近代美術館(MOMA)で、マチスの室内画を前にして稀有な体験をする。



ECHO—海と空 油彩 F100号 2013年 第89回白日会展

「反射して呼吸しながら広がる光が部屋の空気をふくらませる…。細やかな描写は一切ないのに描かれているすべてが見事なまでに完璧で、これは世界そのものをダイレクトに写しているのだと。次元が違う感動でした。愉しくラクに描いたように見えてパーフェクト。それが少し壊れていくような歪みもあって、絵の面白さの極みに魅せられた」
 大学院修了後、予備校時代からの師である岡田高弘の勧めで九四年白日会展に出品し始める。
 色彩に対する関心が高まり、フランス近代絵画—なかでもルドン、ボナール、ルノワール、マチスの色彩の

組み立ての原理を研究し、印象派がもたらした成果の総合者といわれるボナールを自分なりに解釈する作品を試みている。
 九八年白日会会員となり、日展に出品したのは翌年三五歳の時。日展特選(01年、05年)を受け、日展会員となる一方で、会派を超えて同じ造形感覚と共通理解を持つ色彩派の仲間たちと展覧会を重ねてきた。
 その色彩について語る。
 「色彩の構成には冷静な全体性の判断が必要なんです。色を感情で使ったらもう終わりです。それくらい厳密なもの。こう来たらこうと将棋や



グリーンシンフォニア 油彩4号 ★

チエスをやるような知的な面白さがある。一歩間違えれば空中ブランコから墜落しかねない、少しの緩みもない緊張の連続が、画面の静止した世界で行われているんです」

「セザンヌ、マチス、ボナール…、彼らの絵は決して自由画じゃない、或る意味で不自由画です。」

ボナールが面白いことを言っています。画面において色彩は変えられない。ただしかたちは自由に変えられる。だからデッサンが重要だ」と。普通は逆ですよ。この謎の言葉こそ色彩の秘密を語るキーポイントです」

宿りの深遠

母屋からアトリエに続く庭に、剪定された樹木がこまやかな感覚の行

き届いた配置で植えられている。教師だったという父が亡くなった後、庭木を整理して、自らの楽しみで作庭に取り組んできた。

枯山水の禅庭を創った夢窓国師にはじまる造園こそが、日本美のコンボジションを形づくるものという自説を具現化する、ささやかな「場」には、小さな森羅万象が息づいている。

「芭蕉の『許六離別の詞』に『まことありて、しかも悲しびを添ふる』と後鳥羽上皇の歌の奥義が書かれています。ようやくそういうことが感じられる年代になってきたかと思えますね。たとえば黄色を使っても、鈍い色に、ちよつと濁った感じになってもいいのではないかと思うようになりました。」

高らかなラッパのカーンと響き渡る音色は、西洋画の理想とする色ですが、そこにはない何かしみじみとしたものが宿っている。たとえば坂本繁二郎のような」

「現存しないもの、失われたものに対する憧憬」が、芸術の根本動機ではないかと、予感のように抱いてきた思いを語る画家は、萩原朔太郎を愛する。

ふらんすへ行きたくしと思へども
ふらんすはあまりに遠し
せめては新しき背広をきて
きままなる旅にいでてみる。
汽車が山道をゆくとき

みづいろの窓によりかかりて
われひとりうれしきことをおもはむ
五月の朝のしののめ
うら若草のもしえいづる心まかせに。

(旅上『純情小曲集』)

心の中にしかない「ふらんす」を詠った朔太郎は、生涯幻しを見続けた幻視者であった。画家寺久保文宣もまた……。



アトリエの前庭は、画家が手ずから植えた樹木が美しい配置で緑の空間をつくっている。

寺久保文宣 (てらくぼ・ふみのり)



- 1964年 埼玉県生まれ
- 1984年 久米桂一郎賞
- 1990年 東京藝術大学大学院修了 (田口安男教室)
- 1994年 白日会展一般佳作賞
- 1995年 白日会展会友奨励賞
- 1998年 白日会展安田火災美術財団奨励賞
白日会会員推挙 鸚鵡の会 (~2009年)
- 1999年 白日会展丸沼芸術の森賞 日展初出品初入選
安田火災美術財団奨励賞展 (安田火災東郷青児美術館) かけがえない現象 (現・英英緑緑 白日会会員選抜展) (日本橋三越本店 ~以降毎年)
- 2001年 白日会展U賞 埼玉県展埼玉県知事賞
日展特選 (05年)
- 2002年 白日会展M賞
- 2003年 個展 (日本橋三越本店 06、10年 高松三越 07年 松山三越 08年 仙台三越 10年)
- 2006年 LIONCEAUX 現代洋画の俊英たち展 (日本橋三越 ~ 09年)
- 2007年 彩象展 (埼玉県立近代美術館 08年)
- 2008年 カラーズ(寺久保、傍島幹司、蛸子真理央) (東京大丸)
- 2010年 個展 (松坂屋本店) LIONCEAUX PLUS 展 (日本橋三越 ~ 13年)
- 2014年 N+N「油絵の魅力」(練馬区立美術館)
- 現在 白日会常任委員 日展会員 日本大学芸術学部非常勤講師